

【特集】 本学聖堂特集③

建築家・竹腰健造の建築活動について

——戦後の代表作品である聖心女子大学キャンパス計画を中心として——

下山 美月

内田 青蔵

1 はじめに

1-1 研究目的

竹腰健造（一八八八—一九八二）は戦前期、AA（アーキテクチュラル・アソシエーション）スクールで建築を学び、RIBA（ロイヤル・インスティテュート・オブ・ブリティッシュ・アーキテクト）建築家資格を取得した日本

人で数少ない建築家であり、現在の日建設計の源流を築いた人物のひとつである。

竹腰は一九一七（大正六）年に住友の営繕課に入社し、一九三三（昭和八）年に住友時代からともに働いた長谷部鋭吉<sup>①</sup>と合同で「長谷部竹腰建築事務所」を設立している。住友時代以来、設計活動は長谷部が中心的役割を担い、事務所の経営面を竹腰が担当していた。<sup>②</sup>そのため、これまで建築家として竹腰に注目した研究は極めて少なかった。しかし、竹腰は関西を中心に多くの作品の設計や建設に携わり、とりわけ戦後は建築家として精力的に設計活動を展開し、現存している作品も確認することができる。

そこで本稿では、竹腰の建築活動を見直し、最初に作品や著書、論考などの分析を通して、建築家としての作風の変化について考察する。次に、戦後、初めての作品且つ代表作でもある聖心女子大学キャンパス計画に注目し、作風の一端を解明してみたい。

## 1-2 研究資料・方法

竹腰の建築観を明らかにするため、彼の著書である『能楽三昧』（一九五八年）、『懐旧譜』（一九七七年）、『雅俗九十年』（一九七九年）、『幽泉自叙』（一九八〇年）の四冊と、『建築と社会』、『建築雑誌』を中心とした雑誌掲載の論考、講演会や座談会の資料一四件〔表2-1参照〕、合計一八件の言説を用いて、竹腰の人物像や建築思想などの分析を行う。

また、竹腰の作品が掲載されている「竹腰健造特集」（『建築と社会一九五九年一月号』日本建築協会、pp.115-124、一九五九年一月）と『長谷部竹腰作品集』（長谷部竹腰建築事務所、城南書院、一九四三年一月）をもとに収集した

五六件の作品〔表3―1参照〕について外観の意匠的特徴をまとめ、時代的な変化をもとに作品の建築的特徴を考察する。<sup>(3)</sup>また、言説で明らかになった特徴が作品にどのように表れているのかにも注目しながら、考察していく。

聖心女子大学キャンパスについては、キャンパスの全体計画や校舎、聖堂などの建築的な特徴をまとめたい。主資料は、施工を担当した清水建設が所有する図面や仕様書とし、その内訳は、聖心女子大学講堂新築工事関連図面二二枚、聖心女子大学講堂新築工事関連訂正・変更版一七枚、聖心女子大学新築第五期工事（聖堂）図面一七枚、その他（図面／仕様書等）六枚の合計六二枚である。なお、これら以外にも『聖心女子大学一九一六〜一九四八〜一九九八』（聖心女子大学、一九九八年一〇月二三日）に掲載された配置図などの図面も研究資料として用いる。

### 1―3 既往研究

竹腰は建築界ではよく知られた存在であるものの、既に指摘したように、建築家として竹腰を取り上げた研究は極めて少ない。以下、代表的なものを簡単に紹介したい。

渡邊研司は、竹腰のイギリス留学について紹介している。すなわち、一八世紀半ばから二〇世紀にかけてのイギリスの建築界の発展とその建築教育に関して分析するなかで、戦前期に日本人としてイギリス留学し、RIBA建築家資格を取得した櫻井小太郎と竹腰健造を取り上げ、竹腰の留学先であったA Aスクールでの教育方針やRIBA建築家資格の取得までの経緯を比較している。これによれば、一九一三（大正二）年から一九一七（大

正六 年にかけて留学していた竹腰は、一九一三年から一九一六年まで A A スクールに在籍していた。竹腰が在籍していた一九一〇年代にはすでに A A スクールは R I B A 建築家資格試験の試験免除校に認定されていた。そのため、竹腰は資格試験準備コースで学び、一九一五年に試験に合格している。ただ、当時、外国人は R I B A の会員にはなれず、実質的には準会員として扱われていたことが論じられている。<sup>(4)</sup>

また、石田潤一郎は竹腰の経歴についてまとめている。すなわち、住友営繕課から日建設計ができるまでの流れの中で、竹腰の果たした役割について論じ、日建設計の設立には直接関与はしていないものの、日建設計の基礎となる日本建設産業をつくった重要人物であることを指摘している。<sup>(5)</sup>

以上の二点が主な既往研究となるが、いずれも竹腰の経歴や果たした役割に関するもので、竹腰の建築作品や建築観についての研究はみられない。

また、聖心女子大学キャンパスに関しては、二〇一七（平成二九）年に旧久邇宮本館や正門が国の重要文化財に指定される際、対象建物について調査が行われ、報告書が作成されている。また、キャンパスの建物に関する論文としては、聖心女子大学キリスト教文化研究所発行の『宗教と文化』誌上で安發和彰と乾睦子の論考が挙げられる。安發は聖堂建築について創建の経緯と建物の概要をまとめている。また、宗教的な枠組みの中で修道院の霊的観想生活にもふさわしい清楚な空間を目指している設計の意図が窺えると論じている。<sup>(6)</sup> また、乾は、聖堂に用いられている石材について目視調査を行い、それぞれの産地や石材の特徴を述べている。<sup>(7)</sup> ともに貴重な論文であるものの、いずれも宗教学や文化財的な観点からの考察で、聖堂およびキャンパス内の建物、キャンパス全

年	経歴	主要作品
1888	M21 6月25日、石川県金沢市生まれ	
1909	M42 東京帝国大学工科大学建築学科に入学	
1912	T1 東京帝国大学工科大学建築学科卒業	Design for a Town Hall (卒業制作)
1913	T2 英国に留学し、AAスクールにて学ぶ	
1915	T4 RIBAの建築士資格試験に合格、オースチン建築事務所勤務しながら、ロイヤル・アカデミーにて修学	
1917	T6 ロンドン・テクノロジーでエッチングを修業、ロンドン・ロイヤル・アカデミー展覧会エッチング入選 3月に帰国、5月に住友総本店入社、営繕課勤務	
1918	T7 聖徳記念絵画館懸賞設計競技にて3位入選	聖徳記念絵画館懸賞設計競技
1921	T10 住友合資会社工作部技師となり、工作部建築家勤務	
1928	S3	住友銀行名古屋支店
1929	S4	住友銀行人形町支店
1930	S5	岡橋邸、今村邸、古田邸、住友ビルディング(住友銀行本店)
1931	S6 工作部建築課長となる	住友銀行横浜支店、自邸(六甲)
1933	S8 5月住友合資会社工作部解散、株式会社長谷部竹腰建築事務所設立、常務取締役就任	神戸岡崎ビル、東京住友ビル
1934	S9	神戸住友ビル、福岡住友ビル、新大阪ホテル
1935	S10	大阪株式取引所、住友銀行熊本支店
1936	S11	住友銀行和歌山支店、鐘淵紡績織丸子工場
1937	S12 株式会社長谷部竹腰建築事務所解散、個人経営での長谷部竹腰建築事務所となる	東京手形交換所、京都住友ビル、新居浜住友クラブ
1938	S13	丸紅商店京都支店、旧大阪共同信託
1939	S14	大阪日本生命保険本店
1940	S15	京都陽明文庫、旧共同信託福岡支店
1944	S19 長谷川竹腰建築事務所解散、住友土地公務株式会社吸収合併、同社専務取締役就任	
1945	S20 日本建設産業株式会社(現/住友商事株式会社)と改称、取締役社長に就任	
1946	S21 8月日本建築協会会長に就任	
1947	S22 日本建設産業株式会社取締役社長を退任(公職追放令による)	
1948	S23 株式会社双星社竹腰建築事務所を開設	
1949	S24 聖心女子大学顧問となる→聖心女子大学キャンパス整備計画開始	聖心女子大学(計画)
1950	S25 公職追放解除、大阪府建築審査会会長、有限会社双星社を株式会社双星社竹腰建築事務所と変更、取締役社長に就任 (日本建設産業株式会社から建築土木部門が独立、「日建設公務株式会社」となる→現在の「日建設」の始まり)	聖心女子大学(第1期工事)
1951	S26	聖心女子大学(第2期工事)
1952	S27	聖心女子大学(第3期工事)、神戸海星女子学院礼拝堂
1954	S29	聖心女子大学(第4期工事)、大阪被昇天学園
1955	S30 大阪府知事より大阪府建築行政の功績を表彰される	西宮仁川学院、西宮マリヤ幼稚園
1956	S31	西宮中尾邸、東京聖心女子学院
1957	S32 建築関係功労賞として黄綬褒章授与される	神戸愛徳童貞会舞子礼拝堂、八尾吉川邸
1958	S33 日本建築協会会長を退任	大阪市長会館、聖心女子大学(第5期工事)
1959	S34	大阪能楽会館
1960	S35 日本建築学会名誉会員に選ばれる	法隆寺聖徳会館
1961	S36 大阪府芸術賞受賞	大阪市立中央図書館
1965	S40	小林聖心女子学院
1977	S52 社名を株式会社双星設計と改称、相談役となる	
1981	S56 7月28日死去、享年93歳	

体の計画の建築的観点からの研究はみられない。

## 2 竹腰健造の経歴と言説からみる建築観について

### 2-1 竹腰健造の経歴について

既往研究をもとに竹腰の経歴をまとめたものが表2-1である。以下、これをもとに、簡単に竹腰の経歴を見てみたい。

竹腰は、一八八八（明治二一）年石川県金沢市に生まれている。実家は男爵家で、実父は石川県知事を務めた岩村高俊、実兄は東京芸大出身の美術評論家・岩村透である。

一九〇九（明治四二）年に東京帝国大学工科大学建築学科に入学し、同級生には渡辺仁（一八八七—一九七三）や西村好時（一八八六—一九六二）といった著名な建築家がいる。一九二二（大正元）年に卒業し、実兄・岩村透の勧めで、翌年一九二三（大正二）年にイギリスへ留学、AAスクールで建築を学ぶ。一九二五（大正四）年にはRIBAの資格試験に合格する。その後オースチン建築事務所へ勤務しながら、ロイヤル・アカデミーでエッチングを勉強し、一九一七（大正六）年と一九一八（大正七）年に出席したロイヤル・アカデミー展覧会のコンクールにおいて二年連続で入選し、作品の評判も良くすぐに売却された。通っていたエッチング・コースの主任からも画家としての才能を買われ、日本に戻ることを惜しまれるほどの腕前であったという<sup>9)</sup>。

一九一七年三月に帰国し、同年五月に住友総本店に入社し、営繕課建築係付属となる。当時の住友営繕部の中

心メンバーは、日高胖<sup>(1)</sup>（二八七五―一九五二、一九〇〇年入社）、長谷部鋭吉（一八八五―一九六〇、一九〇九年入社）が挙げられ、竹腰にとつて彼らは非常に大きな存在であった。共に東京帝国大学工科大学建築学科を卒業した先輩・後輩の關係で、特に長谷部は年齢も近く、仕事を共有していくパートナーであった。

入社時の住友営繕部（住友合資会社工作部）は、各地に銀行建築や住友関連のオフィスの建設を行っていたが、本店の建設が完成すると、昭和恐慌による経済不況もあって、所員解雇を積極的に行つた。そのため、當時、実質的に工作部をまとめていた長谷部と竹腰は、一九三三（昭和八）年、所員らと独立して「長谷部竹腰建築設計事務所」を設立している。住友側も工作部の独立を支持し、金銭面での支援などを行うなど、前向きな出発でもあったが、戦時中の一九四四（昭和一九）年に解散している。

戦後一九四五（昭和二〇）年、竹腰は新たに日本建築産業株式会社を興し、社長に就任している。しかし、一九四七（昭和二二）年、財閥解体による公職追放令を受け、日本建設産業株式会社社長を退任することになる。

一方、この時期、聖心女子学院は大学設立の認可がおりたため、大学用キャンパスの計画を担当する建築家を募集していた。公職追放の身であったものの、応募した竹腰は、堪能な英語力もあって、GHQやマッカーサー、聖心のマザーらに建築家としての才能も認められた。そして、聖心女子大学のキャンパス計画とその設計の全てを担う大学顧問となり、自らの戦後の最初の仕事として深くかかわった<sup>(2)</sup>。

また、竹腰は片岡安（一八七六―一九四六）の後任として、一九四六（昭和二一）―一九五八（昭和二三）年までの一二年間に渡って日本建築協会会長を務め、戦後直後の混乱した社会状況の中、関西の建築界の中心的存在の役割を担った。この日本建築協会は社会へ対する建築のあり方や考え方を主張していた機関であり、竹腰が

記事名	出版年	雑誌名	発行
時局下の建築を語る会（壮年者と若年者の対談）	1942.11	建築と社会	日本建築協会
新春随想	1953.1	建築と社会	日本建築協会
老人アパートの問題	1956.3	建築と社会	日本建築協会
近代建築偶感	1956.2	建築と社会	日本建築協会
大正時代の中の島、北浜界限	1958.1	建築と社会	日本建築協会
会長退任の辞	1958.5	建築と社会	日本建築協会
竹腰健造特集号	1959.1	建築と社会	日本建築協会
故長谷部鋭吉氏の哀悼の辞	1960.11	建築と社会	日本建築協会
建築随想	1962.12	建築と社会	日本建築協会
尾崎君を語る	1965.1	建築と社会	日本建築協会
都市行政の現況	1966.5	建築と社会	日本建築協会
日本建築協会五十周年記念座談会 第1回座談会・創立当初と大正時代を語る	1967.3	建築と社会	日本建築協会
日本建築協会五十周年記念座談会 第2回座談会・昭和前期(昭和初年-終戦)を語る	1968.3	建築と社会	日本建築協会
半世紀以上前の英国建築教育	1975	建築雑誌	日本建築学会

表2-2 竹腰の建築系雑誌への寄稿記事

会長を務めていた期間には大正期から刊行されていた『建築と社会』の復刊や、建築士法など建築に関する法律の改革に対して協会のあり方を見直すなど、協会の存在そのものにも大きく影響を与えたといえ、戦後直後の日本の建築界の発展に欠かせない存在であったといえる。

## 2-2 言説からみる建築思想

竹腰の建築系雑誌への寄稿は少なく、現在確認されたものは表2-2に示した一四件のみである。

雑誌の掲載記事の内容は、大半が社会状況や経済性についてであり、都市と建築の役割などと関連づけて述べているものが見られる。また、戦後は日本建築協会会長の立場としての主張が多く、建築家としての考えだけではなく、社会的立場を意識した発言が多いといえる。いづれにせよ、その発言内容を整理すると、①主に大坂倶楽部で行われた講演会<sup>(1)</sup>などでの近代建築



を中心とした建築に対する思想的な主張、②「関西の建築史を語る」<sup>15</sup>においてこれまでの大阪の発展を振り返り述べているような建築の都市と社会に対する考え方、③「新春所感」<sup>16</sup>のような日本建築協会会長としての言葉、そして、④『建築と社会』の「竹腰健造特集」<sup>17</sup>から見られる一緒に建築活動を展開してきた長谷部鋭吉への思いという四つに分類できる。そこで、ここでは①の竹腰の建築思想に係わる記事を中心に、その主張を見てみたい。さて、戦前期の発言は一件のみで、一九四二（昭和一七）年一月に「戦局下の建築を語る会（壮年者と若年者の対談会）」がある。この対談会は著名建築家である村野藤吾や石川純一郎（竹中工務店設計部長）らを壮年者、小川正（竹中工務店設計部）や吉田信武（大阪府土木部）らを若年者として行われたものである。竹腰は、当時の住宅設計の方針について問われた際、

住宅の建築は大半に於て、国民の風俗習慣について行くものだ、建築家ひとりきばつて見ても、生活様式を作りかへる事は困難だらう、これが国家がこう云ふ生活様式にしるとハツキリ定める事でも出来れば、建築家の行く道も明らかになる、そうでないと建築家、ヤイヤイいつてみたところで何にもならぬ……

（「戦局下の建築を語る会（壮年者と若年者の対談会）」）

と述べている。ここでは、人々の生活像は国家が定めるべきものと建築家の役割の限界を認めるとともに、提案すべき住宅は国民の風俗習慣を取り込んだものでなければならぬことが主張されている。この発言は戦時下のものであり、そのまま鵜呑みにはできないものの、建築家として風俗習慣を重視すべきと主張することは、当時

のモダニズム批判とも受け取ることができよう。こうした竹腰の主張には、村野藤吾も「民族を離れて建築なし」と同調し、「住宅建築も着物の問題が解決すれば建築家は楽だ。国民服で民衆がみなこれについてくると、建築の問題も解決する」（「戦局下の建築を語る会（壮年者と若年者の対談会）」と述べ、国家の指導を期待していることが窺える。

一方、戦後、一九五六（昭和三一）年二月の大阪倶楽部で行われた講演会「近代建築偶感」では、自己紹介として以下のように述べている。

建築の様式の樹立というものは、もちろん一朝一夕に成るものではありません（中略）これは、やはり数十年前からの欧州の若い情熱に燃えた革命的な思想家、芸術家、またはそういう傾向を持った建築家のたゆまざる努力が、戦後の、他動的に、あるいは自主的に旧慣を破棄するようになった敗戦の日本の土地に身を結んだのであります（中略）私自身がそのような思想を持った者であるかの如く響きはしないかと懸念いたしますが、私は決してそういう先覚者ぶった、思いあがり様は致しておりません。

『建築と社会』pp.115-124 一九五九年一月号

これによれば、戦後の日本建築の近代化を紹介しつつ、自分自身はそうした革新的思想家として活躍したのではないとしつつ、「われわれは今や、古くさい旧時代の様式には何らかの感激をも持たない、こういう歴史的な先人の旧慣はよろしく放棄すべきであると考えた」と、戦後直後の建築への思いを述べている。

ただ、戦後の建築界の状況については、「日本で現在、真似されている新様式の建築が、それでは果たして、それでよいのかという問題が起こってきております」とし、日本の現状を「真似」と評して疑問視し、以下のよう述べている。

建築というものは、国情、習慣、風土、国民の経済力によってちがうはづではあります。とくに地震の多い、湿度の高い、経済力の低い日本でアメリカの流行をそのまま模倣すると、いろいろ故障が起こったり維持していくことができなくなったりして参ります（中略）日本的にもう一度よく研究し、消化し、同化して取り入れることが必要であります。（中略）そこで初めて新建築様式というのできる

（『建築と社会』pp.115-124 一九五九年一月号）

ここでは、模倣から日本化による新建築様式の追及の必要性を述べている。こうした国情や風土あるいは慣習を重視する考えは、先の戦前期の主張と連続するものともいえるであろう。

また、能楽が趣味であった竹腰は、講演の中で世阿弥の「珍しきが美しきなり」を引用し、

美と奇は紙一重の差であります。世阿弥にいわせますと、美しい舞い手ばかり見せていると、人は飽きて美しくなくなる。そこで美しくないものを少し混ぜて演じると、それが美しく見える

（『建築と社会』pp.115-124 一九五九年一月号）

とし、この手法を建築にも応用し、新旧（新様式と日本の国風・伝統）の要素を融合化することにより、日本独自の新建築様式が誕生することの可能性を述べている。このように、竹腰は戦後の建築界の新しい動きを歓迎しつつも、日本の風土や慣習といった独自の文化を反映させた日本独自の新建築様式の出現を期待し、また、自らその追及を行っていたことが窺える。

また、一九五九（昭和三四）年には、『建築と社会』で「竹腰健造特集」が組まれている。ここでは竹腰の三七件の作品と自伝的論考が紹介されている。自伝的論考では、帰国後に入社した住友工作部のことが多く語られ、特に住友の仕事を通して学んだ建築手法について述べられている。すなわち、住友工作部では、西欧建築が古典主義様式を用いて建築の威厳性を表現していた手法をもとに、建築の格式性や品格性を強調することにより、大財閥としての住友を表現することをめざしたことを述べている。そして、野口孫一のもつて日高胖らの優秀な所員によって大きくなった住友工作部が、建築を通して財閥としての住友の地位を高めたとして、社内でも工作部の評判が高かったことを回顧している。

また、一九六二（昭和三七）年二月号の『建築と社会』に掲載された「建築随想」では、竹腰は自らの体験を踏まえ、時代とともに変化した建築の様相について三つの変化があったとして、以下のように述べている。

第一は、建築というものが昔は唯箱であった。その中に入って人が働くという無機体と考えてよかつたのでありますが、（中略）今日の建築は無機体から有機体に変わってきている（中略）昔の建物とは本質的

に違ってきているということを第一に感じるのであります。(中略)

第二に現代の建築はコモーションライズされて来たことと云うことであります。(中略) 利潤を目的としたことよって本質的に昔の建築とは変化している。(中略)

第三に、建築の本質的な考えの違いというものは、その生命というものがその長さにおいて昔ほど期待されないということであります。(中略) 一九世紀の終わり、二〇世紀の初期まで建築というものは永遠に残るものと云う考えでいたのであります。(中略) それはなぜかと申しますと、やはり建物が有機体である。又コモーションライズされたこの二点が起こってくる。

〔建築随想〕『建築と社会』pp.96-102 一九六二年二月号)

ここに指摘されている三つの建築の変化は、まさしく機能主義の普及と経済合理主義によるもので、こうした風潮に関しては、竹腰は「近代の思潮であり、建築だけがその思潮から遊離することはできません」とし、その為、これからの建築家としては「芸術、材料、構造、設備、経済、これらに調和した判断をする人でなければならぬ」と述べている。これによれば、今後の新時代の建築家は芸術・材料・構造・設備・経済の五つの要素をバランスよく考えることが求められるという。

いずれにせよ、近代化という時代の中での建築の変化を認めつつも、必要な要素としての五要素の最初に「芸術」を挙げ、最後に「経済」を挙げているのは、古典主義様式から建築を学び始め、住友で学び実践した竹腰健造の建築家としての意地が垣間見えるように思う。言い換えれば、竹腰は、時代の変化に対応して建築そのもの

が変化することを主張していた現実主義的考え方の持ち主であったといえよう。それは、建築会社の経営者としての資質として生かされてきたように思われる。ただ、現実主義者とはいえ、建築の質にはこだわり、とりわけ建築の芸術性や材料をとりわけ重要視していたことが窺える。そしてまた、時代の変化の中で、単なる流行を追うのではなく、日本という国の国民性や気候風土、慣習といったものを取り入れた建築をめざしていたことが窺えるのである。

## 2-3 小結

改めて言説から見える竹腰の建築に対する考えをまとめると、戦後のモダニズムが流行しているなかで、時代に合わせ新しい建築の思想を積極的に取り入れることの必要性を強く感じていることが窺える。ただ、新様式を日本の建築に取り入れる際は、単に模倣するのではなく、気候や風土などの環境面はもちろん、国民の習慣なども含めて、日本に適した建築の創造をめざすべきであることを主張していることがわかる。こうした主張は戦前期の住友時代の経験に基づくものと考えられる。住友時代、西洋建築のもつ格式や品格、質といったものに優位性を見出していたのは、日高や長谷部はもちろん、住友全体で守られる伝統のような考え方からくるものと考えられるが、さらに竹腰が留学していた当時のAAスクールのアカデミックな教育方針も少なからず影響しているようにも考えられる。竹腰がめざしていた建築は、格式や品格、質といったものを失うことなく新様式の考えを取り入れたものであったと考えられる。



No.	竣工年		作品一覧	所在	現存	用途
1	1912	M45	Design for a Town Hall (卒業制作)	-	-	市民ホール
2	1918	T7	聖徳記念絵画館懸賞設計入選	-	計画	美術館
3	1928	S3	住友銀行名古屋支店*	愛知・名古屋	×	銀行
4	1929	S4	住友銀行人形町支店	東京・日本橋	×	銀行
5	1930	S5	住友ビルディング(住友銀行本店)*	大阪・北浜	○	オフィスビル/銀行
6			岡橋林邸	兵庫・西宮	×	住宅
7			今村邸	兵庫・西宮	×	住宅
8			古田邸	兵庫・西宮	×	住宅
9	1931	S6	住友銀行横浜支店*	横浜・中区	×	銀行
10	1933	S8	神戸岡崎ビル(神戸銀行本店)*	兵庫・神戸	×	オフィスビル
11			東京住友ビル(住友銀行東京支店)*	東京・丸の内	×	オフィスビル
12	1934	S9	神戸住友ビル*	兵庫・神戸	×	オフィスビル
13			福岡住友ビル*	福岡	×	オフィスビル
14	1935	S10	大阪株式取引所	大阪・北浜	○	金融
15			住友銀行熊本支店	熊本・魚屋町	○	銀行
16	1936	S11	住友銀行和歌山支店*	和歌山	×	銀行
17			大阪株式取引所事務所	大阪・北浜	×	金融
18			住友銀行新宿支店*	東京・新宿	×	銀行
19			鐘淵紡績織丸子工場	長野・丸子	×	工場
20			住友製鋼工場	-	×	工場
21	1937	S12	東京手形交換所	東京	×	金融
22			住友銀行京都支店*	京都・中京区	×	銀行
23			新居浜住友クラブ*	愛媛・新居浜	○	クラブハウス
24			大同貿易株式会社*	兵庫・神戸	×	オフィスビル
25			宇治電ビル*	大阪	×	オフィスビル
26	1938	S13	丸紅商店京都支店*	京都	○	オフィスビル
27			旧大阪共同信託*	大阪	×	オフィスビル
28	1939	S14	大阪日本生命保険本店*	大阪	○	オフィスビル
29			旧共同信託福岡支店*	福岡	×	金融
30	1950	S25	聖心女子大学 1号館(北棟以外)	東京・広尾	○	学校・教育
31	1952	S27	神戸海星女子学院礼拝堂	兵庫・神戸	○	聖堂・礼拝堂
32	1953	S28	朝日ビル株式会社吹田工場ビヤホール	大阪・吹田	×	クラブハウス
33			江口証券株式会社	大阪・	×	オフィスビル
34			岡三証券本社	大阪・今橋	○	オフィスビル
35	1954	S29	大阪被昇天学園	大阪・箕面	○	学校・教育
36			聖心女子大学 講堂(マリアンホール)	東京・広尾	○	学校・教育
37	1955	S30	西宮仁川学院	兵庫・西宮	×	学校・教育
38			西宮マリヤ幼稚園	兵庫・西宮	×	学校・教育
39			西宮カントリークラブハウス	兵庫・西宮	○	クラブハウス
40	1956	S31	西宮中尾邸	兵庫・西宮	×	住宅
41			東京聖心女子学院	東京・三光町	○	学校・教育
42			武田薬品工業株式会社寮	兵庫・西宮	×	集合住宅(社宅)
43	1957	S32	神戸愛徳舞子礼拝堂	神戸・舞子	○	聖堂・礼拝堂
44			石川交通株式会社	石川・金沢	×	オフィスビル
45			松下電器産業株式会社営業所	広島	×	オフィスビル
46			松下電器産業株式会社営業所	福岡	×	オフィスビル
47			松下電器産業株式会社 配電器工場	大阪・豊中	×	工場・研究所
48			中川電機株式会社冷蔵庫工場	大阪・布施	×	工場・研究所
49	1958	S33	大阪市長会館	大阪・網島町	○	庁舎
50			聖心女子大学 聖堂	東京・広尾	○	学校・教育
51			愛徳童貞病会聖母病院厨房	兵庫・神戸	×	病院
52			武田薬品工業株式会社研究所	大阪・大阪	×	工場・研究所
53	1959	S34	大阪能楽会館	大阪・中崎西	×	劇場
54	1960	S35	法隆寺聖徳会館	奈良・生駒	○	社寺関連
55	1961	S36	大阪市立中央図書館	大阪・北堀江	×	図書館
56	1965	S40	小林聖心女子学院礼拝堂	兵庫・宝塚	○	聖堂・礼拝堂

表3-1 竹腰の建築作品<sup>(18)</sup>



ンパス計画は戦後最初に手がけた仕事であり、聖心女子大学との交流を機にカトリック系の教育施設や聖堂・礼拝堂の設計が増えていることが窺える。また、建築規模的にも聖心女子大学の建築群は大きく、戦後の竹腰の建築作品の代表作といえよう。

### 3-2 外觀意匠からみる竹腰の建築作品の特徴

次に、これらの建築作品の作風について見てみたい。様式的には、戦前・戦後ではいわゆる歴史主義の建築から機能重視のモダニズム建築への移行が見られることから、分析にあたっては、①窓形状②柱表現③装飾性④外装仕上げの四つの建築部位に着目し、各建物についてその特徴を見ていくことにする。そして⑤として建築全体の意匠的観点から、歴史主義の建築と機能重視のモダニズム建築と大きく二つに分類する。これらの五つの項目より表を作成し、時代的な変遷を明らかにする。

さて、各項目ごとに整理して作成したのが表3-2である。なお、表作成にあたっては、資料からの情報も合わせて各項目に当てはまる箇所を●、資料への記載は確認できないものの写真資料より当てはまると判断した箇所を◎とした。

以下、表3-2より、項目ごとに明確かつ特徴的な変化を簡単にまとめたい。

#### (1) 窓形状

歴史主義表現の明確な特徴でもある縦長窓は初期の作品から継続していることが確認できる。そして、一九三



# 建築家・竹腰健造の建築活動について

No.	竣工年	作品一覧	所在	現存	用途	構造			窓形状					
						録音装置コンクリート造	鉄筋コンクリート造	木造	縦長	横長	縁起窓	アーチ窓	その他	
1	1912	M45 Design for a Town Hall (卒業制作)	-	-	市民ホール				●	●				
2	1918	T7 聖徳記念絵画館新設計入選	-	計画	美術館		●						●	アーチの開口部
3	1928	S3 住友銀行名古屋支店*	愛知・名古屋	×	銀行		●		●	●			●	アーチの開口部
4	1929	S4 住友銀行人形町支店	東京・日本橋	×	銀行		●		●	●			●	アーチの開口部
5	1930	S5 住友ビルディング(住友銀行本店)*	大阪・北浜	○	オフィスビル/銀行		●		●	●			●	
6		岡橋林部	兵庫・西宮	×	住宅		●	●	●					縁側
7		今村部	兵庫・西宮	×	住宅		●	●	●				●	
8		古田部	兵庫・西宮	×	住宅		●	●	●				●	
9	1931	S6 住友銀行塚浜支店*	横浜・中区	×	銀行		●		●	●			●	
10	1933	S8 神戸岡崎ビル(神戸銀行本店)*	兵庫・神戸	×	オフィスビル		●		●	●				
11		東京住友ビル(住友銀行東京支店)*	東京・丸の内	×	オフィスビル		●		●	●				
12	1934	S9 神戸住友ビル*	兵庫・神戸	×	オフィスビル		●		●	●			●	
13		福岡住友ビル*	福岡	×	オフィスビル		●		●	●				
14	1935	S10 大阪株式取引所	大阪・北浜	○	金融		●		●	●				
15		住友銀行熊本支店	熊本・魚屋町	○	銀行		●		●	●			●	
16	1936	S11 住友銀行和歌山支店*	和歌山	×	銀行		●		●	●				
17		大阪株式取引所事務所	大阪・北浜	不明	金融		●		●	●				
18		住友銀行新館支店*	東京・新館	×	銀行		●		●	●				
19		録音録音機九子工場	長野・九子	×	工場		●		●	●				トップライト
20		住友製鋼工場	-	×	工場		●		●	●				
21	1937	S12 東京手形交換所	東京	×	金融		●		●	●				
22		住友銀行京都支店*	京都・中央区	×	銀行		●		●	●				トップライト
23		新館住友クラブ*	愛媛・新居浜	○	クラブハウス		●	●	●	●				
24		大同貿易株式会社*	兵庫・神戸	×	オフィスビル		●		●	●				
25		宇治電ビル*	大阪	×	オフィスビル	●	●		●	●				
26	1938	S13 丸紅商店京都支店*	京都	○	オフィスビル	●	●		●	●				
27		旧大阪共同証券*	大阪	×	オフィスビル		●		●	●			●	コーナー窓
28	1939	S14 大阪日本生命保険本店*	大阪	○	オフィスビル		●		●	●			●	アーチの開口部
29		旧共同信託福岡支店*	福岡	×	金融		●		●	●				
30	1950	S25 聖心女子大学 1号館(北棟以外)	東京・広尾	○	学校・教育		●		●	●				
31	1952	S27 神戸海星女子学校礼拝堂	兵庫・神戸	○	聖堂・礼拝堂		●		●	●			●	バテ窓
32	1953	S28 朝日ビル株式会社吹田工場ビヤホール	大阪・吹田	×	クラブハウス		●		●	●				
33		江口証券株式会社	大阪・	×	オフィスビル		●		●	●				
34		岡三証券本社	大阪・今橋	○	オフィスビル	●	●		●	●				
35	1954	S29 大阪植野学園	大阪・箕面	○	学校・教育		●		●	●				
36		聖心女子大学 講堂(マリアンホール)	東京・広尾	○	学校・教育		●		●	●				
37	1955	S30 西宮仁川学院	兵庫・西宮	×	学校・教育		●		●	●				
38		西宮マリア幼稚園	兵庫・西宮	×	学校・教育		●		●	●				
39		西宮カントリークラブハウス	兵庫・西宮	○	クラブハウス		●		●	●				
40	1956	S31 西宮中尾邸	兵庫・西宮	×	住宅		●	●	●	●				
41		東京聖心女子学院	東京・三光町	○	学校・教育		●		●	●				正方形
42		武田薬品工業株式会社寮	兵庫・西宮	×	集合住宅(社宅)		●		●	●				
43	1957	S32 神戸愛徳女子礼拝堂	神戸・御子	○	聖堂・礼拝堂		●		●	●				
44		石川交通株式会社	石川・金沢	×	オフィスビル		●		●	●			●	コーナー窓
45		松下電器産業株式会社営業所	広島	×	オフィスビル		●		●	●				
46		松下電器産業株式会社営業所	福岡	×	オフィスビル	●	●		●	●				
47		松下電器産業株式会社 配電器工場	大阪・豊中	×	工場・研究所		●		●	●				
48		中川電機株式会社冷環境工場	大阪・布施	×	工場・研究所		●		●	●				
49	1958	S33 大阪市長会館	大阪・鶴島町	○	庁舎		●		●	●				
50		聖心女子大学 聖堂	東京・広尾	○	学校・教育		●		●	●			●	バテ窓
51		愛徳直母会聖母病院厨房	兵庫・神戸	×	病院		●		●	●				トップライト
52		武田薬品工業株式会社研究所	大阪・大阪	×	工場・研究所		●		●	●				
53	1959	S34 大阪産業会館	大阪・中崎西	×	劇場		●		●	●				ルーバー、正方形
54	1960	S35 法善寺聖徳会館	奈良・生駒	○	社寺関連		●		●	●				
55	1961	S36 大阪市立中央図書館	大阪・北堀江	×	図書館		●		●	●				
56	1965	S40 小林聖心女子学校礼拝堂	兵庫・宝塚	○	聖堂・礼拝堂		●		●	●				ステンドグラス

○年代後半からは近代建築の特徴である横長窓や連続窓が増え始めるものの、縦長窓も同時に用いられていることがわかる。こうした新旧の窓形式の併存の理由としては、竹腰が大型のガラスの使用への不安を抱いていたからと考えられる。すなわち、「竹腰健造特集号」『建築と社会一九五九年一月号』（日本建築協会、pp.115-124、一九五九年一月）では、竹腰は「ガラス張り論争」として新材料のガラスは危険であり、新建築として出現し始めたガラス張りの建物は危ないと考え、東京大学の武藤清らが主張するガラス張りの欠点と地震に対する不安を引用した上で、「現代建築の美しさは不安感の上に立っている」と述べ、「勇敢に新流行を追える建て逃げの建築家は羨ましく思った」と皮肉も込めて批判している。このように、窓に用いるガラスに対し不安感を持っていたことから大きな連続窓を設けた建築は積極的には手掛けなかったと考えられる。

## (2) 柱表現

初期の作品では、歴史主義表現の大きな特徴のひとつであるオーダーまたはオーダーに則した柱を多様していたのに対し、一九三〇年代後半になるとシンプルな柱表現のものが増え始めるといふ明確な変化が見られる。しかし、柱そのものをなくすことはせず、柱全体の装飾性をなくすようにその表現の方法を変化させていることから、建物用途にも影響されつつ、次第に近代化している様子が窺える。

また、列柱のように見せるような表現も見られ、装飾的要素は排除しつつも、柱表現を意図的に残すことで、建築の持つ格式性を示したかったのではないかと考えられる。

## (3) 装飾

戦前には帯状装飾、窓装飾、出窓など窓周りの装飾など、歴史主義表現の特徴が一貫して用いられているが、

戦後は装飾的な表現はほとんど見られない。なお、装飾的要素の見られる建築は、聖堂・礼拝堂や能楽会館などの格式性を主張すべきと思われるもののみであり、その表現は戦前とは異なって簡略化されている。そこに竹腰の近代化の表現を見ることができるといえよう。

#### (4) 外壁仕上げ材

戦前期は基本的に石張り仕上げや石造のように見える材料であるのに対し、戦後はコンクリートやモルタルといった素材の変化が見られ、材料からも近代化の様子がわかる。しかし、他の項目と同様に、教会や社寺関連の建築には石張り仕上げが用いられ、また、数種類の材料を使い分けられているなど、素材にこだわる傾向が他の用途の建築以上に強く見られる。

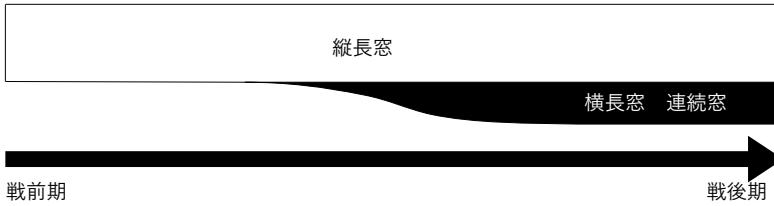
#### (5) 建物全体の意匠

竹腰の建築作品の特徴として、全体的な傾向は歴史主義的な意匠から機能重視なモダニズム的な意匠へと変化している。そのなかでも建築の格式性を示す場合には窓形状や柱表現、装飾、外壁の石張り仕上げなどの歴史主義表現ともいえる要素を残しながら、その意匠を簡略化することでモダニズム化を表していると考えられる。

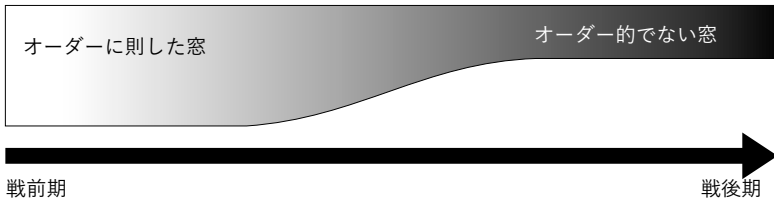
#### 3-3 小結

竹腰の作品の変遷として、銀行建築や住友関連のビルなど伝統や格式を示すような歴史主義的なデザインから、学校やオフィスビルなどの機能性を重視した中でのシンプルなデザインへという全体的な流れが窺える。機能性を重視した中でも教会や能楽堂、社寺関連の施設においてはその伝統性や品格を考慮した上で、簡略化した要素を設けることでそれらを示していたと考えられる。こうした表現の特徴は、言説とも一致しているといえる。す

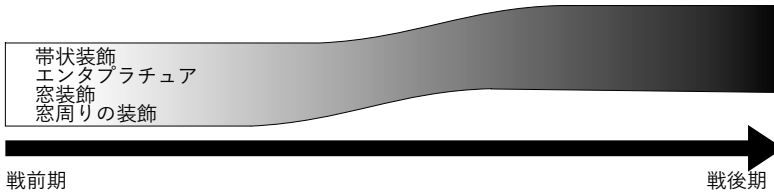
(1) 窓形状



(2) 柱表現



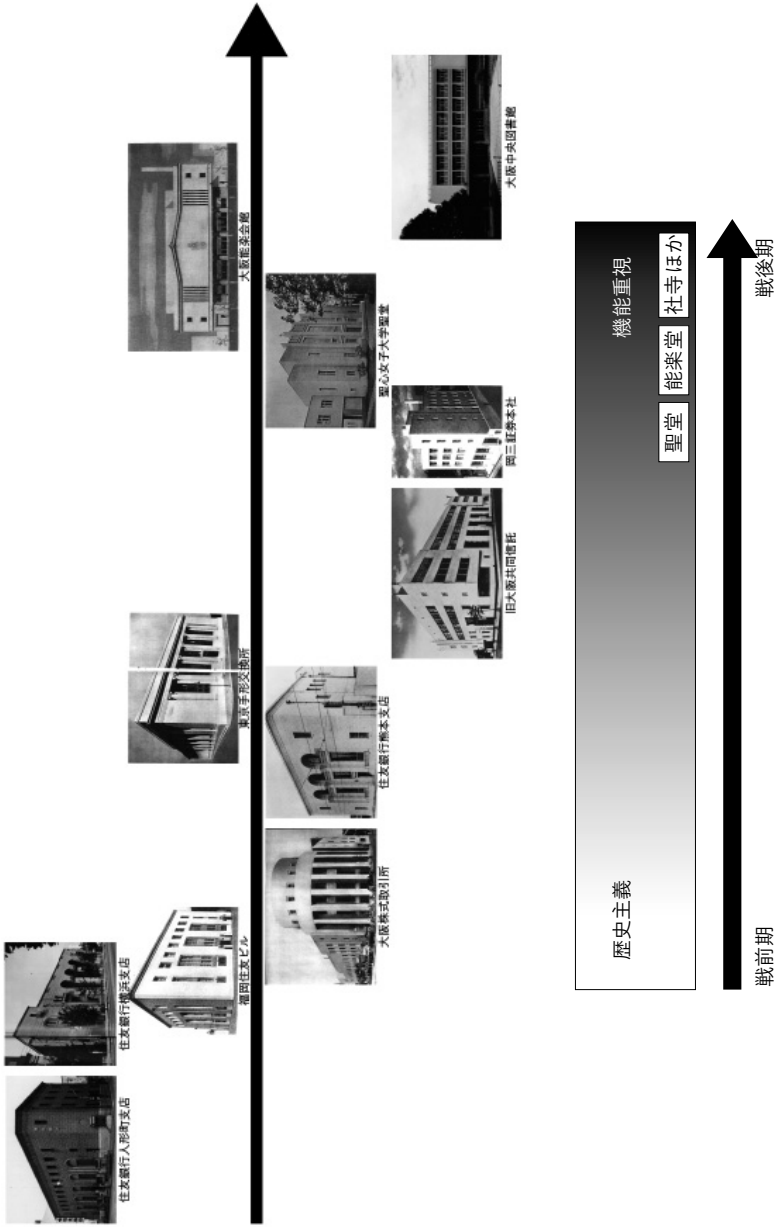
(3) 装飾



(4) 外壁仕上げ材



建築家・竹腰健造の建築活動について



年	社会・政府的な動き	聖心学院の動き	竹腰の動き
1801		パリ・アミアンにて聖心学院が創設	
1908		日本で聖心学院が設立	
1910		三光町に高等女学校・小学校・幼稚園が開校	
1913			東大卒業（1912年）後、イギリスへ留学
1916		高等専門学校（聖心女子大学の前身学校）が開校	オースチン建築事務所に勤務しながらエッチングを学ぶ
1917			イギリス留学より帰国、住友営繕課（工作部）
1918	大学令→女子大は認められず		
1928		関東大震災で校舎が被災し、アントニン・レーモンドが校舎・聖堂を再建（→現・初等科校舎）	
1933			長谷部竹腰建築事務所の設立
1945	9月 文部省「新日本建設の教育方針」 10月 GHQ「五大改革指令」 10月 CI&E「教育の四大指令」 12月 文部省「女子教育刷新要綱」 →女子大の設立 →大学における男女共学の実施		日本建設産業株式会社取締役社長へ就任
1946	教育刷新委員会設置		日本建築協会会長へ就任（～'58）
1947	教育基本法、学校教育法、4・6・3・3・4年制導入	中等科設置	公職追放令のため日本建設産業株式会社取締役社長を退任
1948		高等科設置 文部省の新たな教育方針をきっかけに初期新制女子大学の一つとして発足	
1949	マッカーサーが基金を集め、大学設立を支援聖心側と英語で会話できる建築家を探す	大学発足にあたり、三光町から現在の広尾へ移転→計画が始まる大学第1期建築工事着工	大学設立の担当建築家が決まらず→英語が堪能な竹腰に声が掛かる聖心のマザー・ブリット、マザー・シッケルと会う→経歴調査ののち、決定聖心女子大学顧問となり、設計・監理を担う
1950		大学第1期建築工事竣工	
1951		大学第2期建築工事竣工	
1952		大学第3期建築工事竣工	
1954		大学第4期建築工事竣工	
1958		大学第5期建築工事竣工	日本建築協会会長退任

表4-1 聖心女子学院と竹腰健造に関する年表<sup>(20)</sup>



なわち、竹腰の設計には歴史主義のデザインや要素と当時新しかったモダニズムの要素とが混ざり合い、その調和が独自のデザインとなって表われていると考えられる。

#### 4 聖心女子大学について

##### 4-1 聖心女子学院の日本設置と大学設立について

聖心会（カトリック女子修道会）を信仰した、聖マгдаレナ・ソフィア・バラ（*Madeleine Sophie Barat*、一七七九—一八六五）は、一八〇一年パリ・アミアンに最初の聖心学院を創設した。この聖心学院は、キリストの精神に基づく教育を通して豊かな感性と高度な知性を持つ自立した女性の教育のための施設で、当時のフランス社会の改革や進歩に貢献できる前衛的なものであり、教育内容の水準も非常に高いものであった。

日本では一九〇八（明治四二）年一月にマザー・ブリジエット・ヘイドンら四人が横浜に到着し、六月に東京の三光町（現在の東京都港区白金）に財団法人聖心女子学院が設立される。このときの敷地は約三万坪で、スイス人建築家のヤン・レツルが興したレツル・エンド・ホラ合資会社の設計による、木骨煉瓦の本館と修道院が建設された。その後、木造赤煉瓦の二階建校舎や聖堂・修道院などが建設されるが、一九二三（大正一二）年の関東大震災で倒壊した。そのため、その後はアントニン・レーモンド<sup>(21)</sup>（一八八八—一九七六）によって鉄筋コンクリートの校舎（一九二五年）と聖堂、校舎（一九二八年）が建設された。これらのレーモンド設計の聖堂と校舎は、現在、初等科の校舎として利用されている。

一方、一九一六（大正五）年、日本における最初のカトリック女子高等教育機関として聖心女子大学の前身学校である聖心女子学院高等専門学校が開校する。それ以前の女子高等教育機関としては、一九〇〇（明治三三）年以降に日本女子大学校、東京女子医学専門学校だけで、その後一九一八（大正七）年には東京女子大学などが開校されていくが、一九一八（大正七）年の大学令においても女子大学は認められなかったため、いずれも大学ではなく専門学校令による機関としての運営に留まった。

こうした女子高等教育機関の様相が大きく変化するのは戦後になってからである。敗戦後、一九四五（昭和二〇）年九月に当時の文部省は「新日本建設の教育方針」として、教育の重要性を主張した教育方針を発表した。さらに、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）もまた、民主主義体制の確立などを基本とした占領政策を出していた中で、特に「五大改革指令」（一九四五年一〇月）やCI&E（民間情報教育局）の「教育の四大指令」（一九四五年一〇月から十二月）などにより女性の政治参加と学校教育の民主化を求めた。そのため、一九四五（昭和二〇）年一二月に文部省は「女子教育刷新要綱」を定め、この中で女子大学の創設の方針を掲げ、日本女子大学校、東京女子大学、津田塾専門学校などの女子専門高等学校らとともに聖心女子大学の設置に関する協議が重ねられ、一九四八（昭和二三）年に認可がおり、女子大学として開学することになる。

聖心女子高等専門学校では、この大学設立の認可を受けると、戦災による校舎の損壊のため、新たなキャンパスを求める移転を決定し、当時、三田の三井倶楽部、麻布の三井本家邸宅跡、李王家御殿（現在の赤坂プリンスホテル）、芝の伊達家邸宅、中島飛行機工場跡地（現在のICU）、元久邇宮御殿の六つの候補地が挙げられ、こ

の中から現在地の聖心女子大学が位置している約二万四〇〇〇坪の敷地の渋谷区広尾の元久邇宮御殿が選ばれ、  
移転した。<sup>(23)</sup>

当時この敷地には、一部を戦災で失っていたものの久邇宮の建物が残っていた。これらの建物は、改修や曳家を経て、大学設立当初から現在まで学生会館や展示室として利用されてきた。<sup>(24)</sup>そして、近代和風建築としてその歴史的価値が認められ、二〇一七（平成二九）年に国の重要文化財に指定されている。

#### 4-1-2 聖心女子大学と竹腰健造

戦後改革では、民主主義や女性の地位向上のため女子教育を重要視し、力を入れていた。この背景にはGHQの影響が大きかったといえる。聖心女子大学の設立、移転に伴う新キャンパス計画は、マッカーサーがその基金を集めていたほど、その中心にはGHQや聖心会のマザーの存在があったという。関東の建築家を中心に多くの応募があるなか、特に聖心のマザーたちとの英語でのコミュニケーションが求められたことと、人間性を特に重要視していたことから、担当建築家を決定できずにいた。

その頃、公職追放令によって日本建設産業株式会社を社長が退任した竹腰は、一九四八（昭和二三）年に新たに株式会社双星社竹腰建築事務所を開設していた。そして竹腰は、翌年の一九四九（昭和二四）年に後任として日本建設産業株式会社を率いていた田路舜哉から聖心女子大学設立にあたっては英語で自由に聖心の人たちと話すことのできる建築家を探しているという話を聞いた。<sup>(25)</sup>竹腰は公職追放の身であることを懸念していたが、田路の働きかけにより聖心女子大学のマザーたちと会う機会が得られ、経歴などの調査ののち認められ、キャンパス

年		経緯		設計者	
1912	T1	-	木造赤煉瓦2階建校舎	ヤン・レツル	
1918	T7	-	木造赤煉瓦聖堂・修道院		
関東大震災（1923年）により倒壊					
1925	T14	-	鉄筋コンクリート造校舎竣工	アントニン・レーモンド	
1928	S3	-	鉄筋コンクリート造聖堂・校舎竣工		
戦災により建物は被害、新制大学設立のため移転の計画					
1949	S24	4.15	大学第1期建築工事着工	竹腰健造	
1950	S25	3.-	大学第1期建築工事竣工		1号館
1951	S26	4.-	大学第2期建築工事竣工		セントジェラルド
1952	S27	3.-	大学第3期建築工事竣工		1号館サイエンスウイング
1954	S29	7.-	大学第4期建築工事竣工		講堂（マリアンホール）
1958	S33	12.-	大学第5期建築工事竣工		聖堂、2号館、修道院
1961	S36	12.27~'62.5.31	1号館大学院棟建築工事		
1963	S38	7.1~12.20	1号館4階寄宿舎建築工事		
1965	S40	6.15~9.30	2号館10番教室（インター食堂）、実験室（屋上）建築工事		
1967	S42	3.-	管理棟竣工：丹下健三設計	丹下健三	

表4-2 聖心女子大学設立までと建設経緯

の設計を担うことが決定する。当時、既に双星社は設立していたものの、実際には日本建設産業株式会社を前にたて、大学顧問という立場で計画、設計、監理の全てを任されることになる。<sup>(26)</sup>

竹腰はこの時を振り返り、自身の著書で「世にはこんなにも敬虔で優れた女性たちがあるものかと驚いた」とマザーたちへの印象を述べている。<sup>(27)</sup> 聖心女子大学側も竹腰に対する信頼は大きく、竹腰が体調を崩した時には各聖心学校の礼拝堂などでミサが行われるほどであった。<sup>(28)</sup> その後も聖心女子大学との繋がりは続き、小林聖心女子学院などのカトリック系の教育施設や教会・礼拝堂などの建設に携わっている。

**4-1-3 聖心女子大学のキャンパス計画と建築的特徴**

キャンパス整備計画は、一九四九（昭和二四）年に始まり全五期にわたって約一〇年間の建築工事が行われている〔表4-2〕。また、戦災によって一部が焼失してしまっていた久邇宮邸御車寄（現在のクニハウス）と本館御常御殿（現在のパレス東棟）、本館小食堂（現在のパレス西棟）が一号館建設のために一

九四九（昭和二四）年に現在の位置に曳家されている「図4-1、2」。

一九四九（昭和二四）年五月に計画された聖心女子大学の鳥瞰図「図4-3」をみると、当初の計画では曳家した後の旧久邇宮本館（現在のクニハウス）も含めて、一号館、二号館、講堂、聖堂といった校舎群に全体的な回廊性を持たせるような計画であったことがわかる。その後の、一九五〇（昭和二五）年に作成された配置図「図4-4」ではまだ渡り廊下が確認できるが、実際にはこの渡り廊下でつながる全体的な回廊性は変更され、実施されていない。<sup>30)</sup>

また、キャンパス全体の構成として、一九五〇（昭和二五）年の配置図「図4-4」をみると、聖堂と講堂の位置関係が一九四九（昭和二四）年の鳥瞰図「図4-3」と実際に建設された配置と入れ替わり、クニハウスと聖堂が並ぶように配置されていることが確認できる。一九五〇（昭和二五）年に何らかの理由で変更された配置が一九五四（昭和二九）年に当初計画していた配置へさらに変更が重ねられた。それにより、聖堂が校舎群の最も中心に位置するような配置となった。

この一連の計画変更の経緯について、竹腰も聖心女子大学も特に明言しておらず、明らかにされていない。しかしながら、カトリック系系大学である聖心女子大学にとって、聖堂は最も格式の高い大学のシンボルである。そのため、正門からのアプローチで最初に目に入る現在の講堂が建っている位置に一度変更されたが、建物の格式性などが重要と考えていた竹腰は、シンボルである聖堂がキャンパスの中心に置かれるべきと考え、配置が見直されたのではないかと推測される。

(1) 校舎―一号館



建築家・竹腰健造の建築活動について

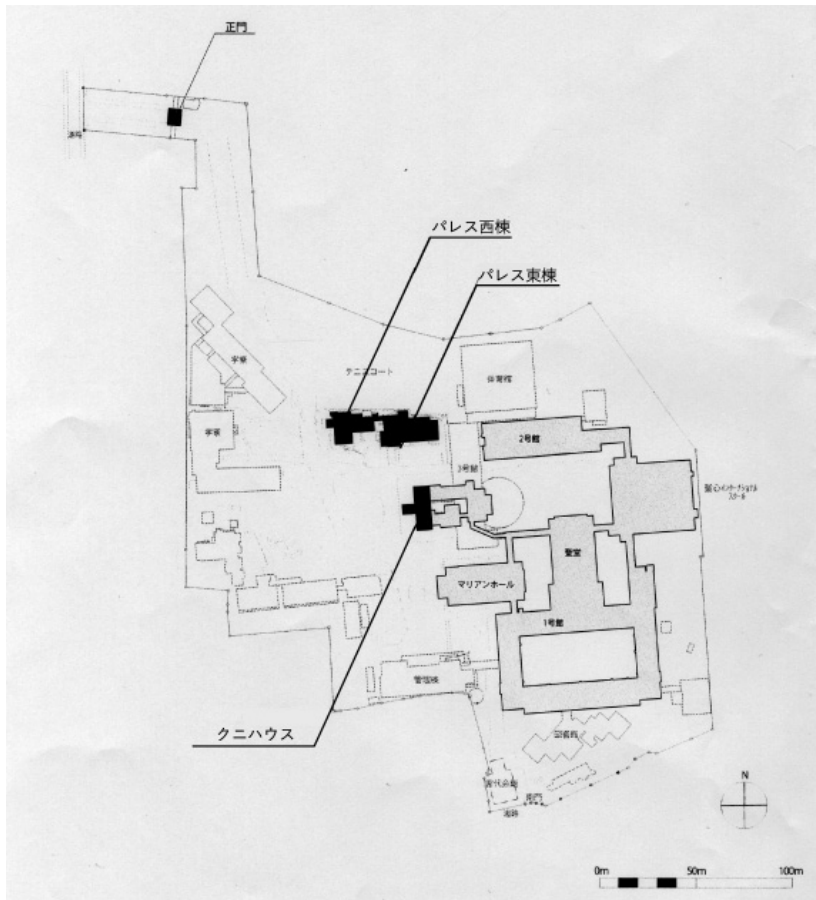
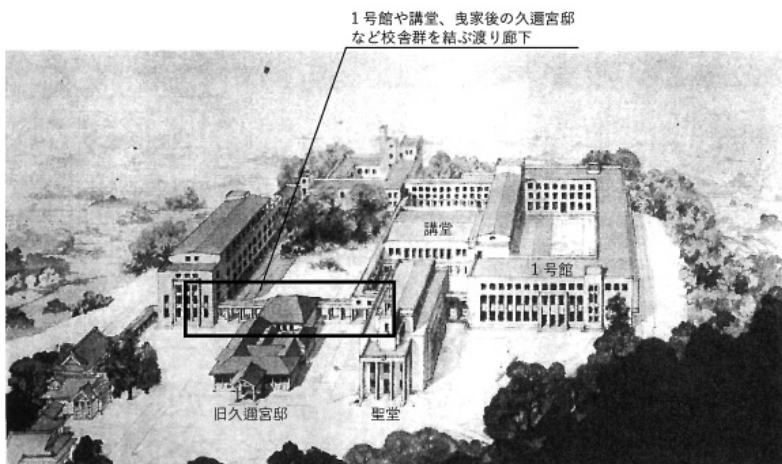


図4-2 1963(昭和38)年の配置図 (曳家後)

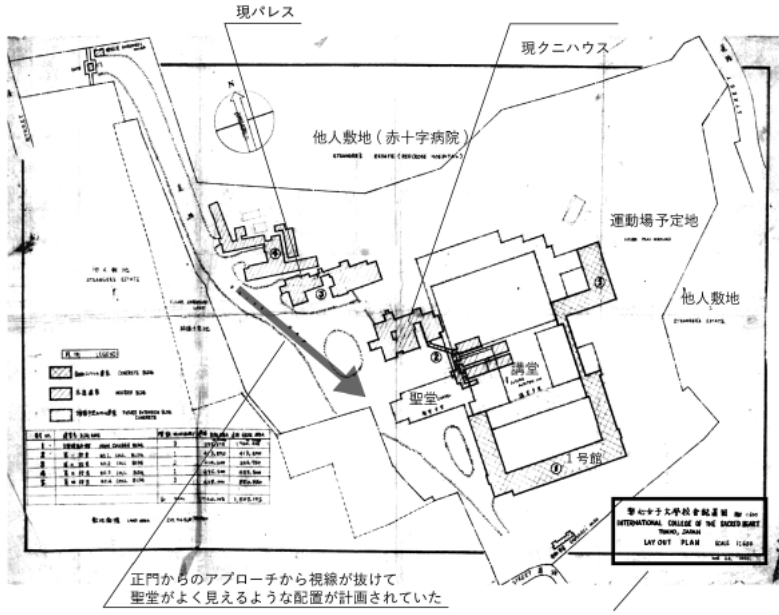


建物上部に十字架があることから聖堂は現在の講堂が建っている位置を想定していたと考えられる。当初は正門からのアプローチによくみえる位置に大学のシンボルである聖堂が配置されるように計画されていた

図4-3 1949(昭和24)年に作成された聖心女子大学鳥瞰図



建築家・竹腰健造の建築活動について



講堂と聖堂の位置関係は計画当初の鳥瞰図(図4-3)と同様に、クニハウスと聖堂が並ぶように配置されている。

図4-4 1950(昭和25)年に作成された聖心女子大学校舎配置図

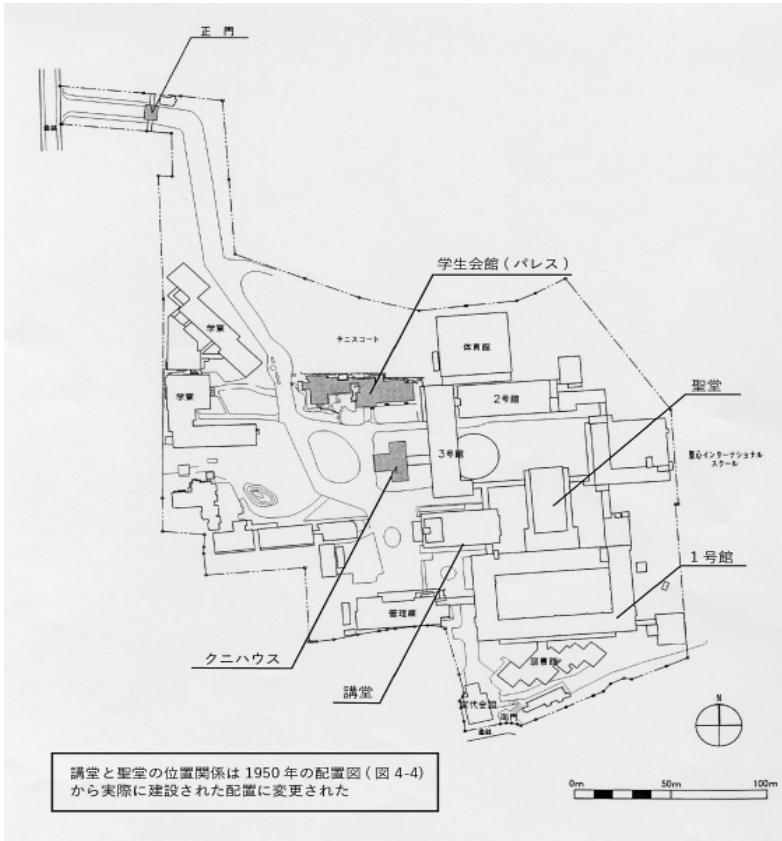


図4-5 現在の配置図

建築家・竹腰健造の建築活動について



図4-6 竣工当時の1号館



図4-7 講堂（マリアンホール）

一九五〇（昭和二五）年の第一期工事において竣工した1号館（北棟以外）は、当時他の大学校舎に多くみられるような大きな連続窓ではなく縦長窓であり、壁面にある柱が印象的な外観を持つ。西扉口部分は仕上げ材を変え、さらにその高さを強調することで建物の威厳を示すというような、歴史主義的な表現要素も見られるもの、建物全体としては、新しい教育方針に沿った民主性・平等性を表現しているような、当時流行していた水平

垂直が意識されたモダニズム的な印象が強いデザインであるといえよう。

(2) 講堂—マリアンホール

講堂（マリアンホール）は、一九五四（昭和二九）年の第四期工事で竣工した。敷地全体の中央近くに位置しており、正門からのアプローチでクニハウスと並んでみえる建物である。講堂の正面ファサードには歴史主義を思わせる柱や塔が確認でき、窓の形式も連続窓ではなく縦長窓が用いられている。また、外壁仕上げについては、柱やポーチ部分は「人造石研出し」、その他の壁面部分は「モルタル」と工事記録の記載が確認でき、石造のよ

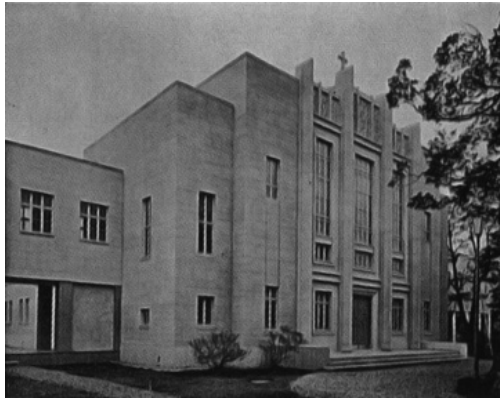


図4-8 竣工当時の聖堂



図4-9 現在の聖堂



図4-10 聖堂（内部）



図4-11 聖堂の側廊

うな仕上げにしていたことがわかる。

講堂は、当初の計画で校舎群の中心に配置される予定であったことから、キャンパス計画においては重要な位置にあった建物のひとつであると考えられる。そのため、一号館の校舎と比較すると、歴史主義の印象が強く感じられるものの、直線的な外観や装飾のないシンプルな意匠は極めて近代的表現といえ、モダニズムの建築をめぐってデザインされていた様子を窺うことができる。

(3) 聖堂

一九五四（昭和二九）年に竣工した聖堂は、三廊式バシリカの形式で、正面ファサードにはバットレスのような四本の柱が設けられている。<sup>(3)</sup>

基本の構成は、ヴォールト天井やクリアストーリー（トレーサリー）をもつ、西洋の伝統的な教会建築にみられる伝統的形式を守っているものの、側廊部分の扱いに特徴が見られる。一般的に三廊式の場合は、側廊部分ま



図4-12 内陣と祭壇



図4-13 内陣の装飾



図4-14 ホワイエの床（ネプロロザート）

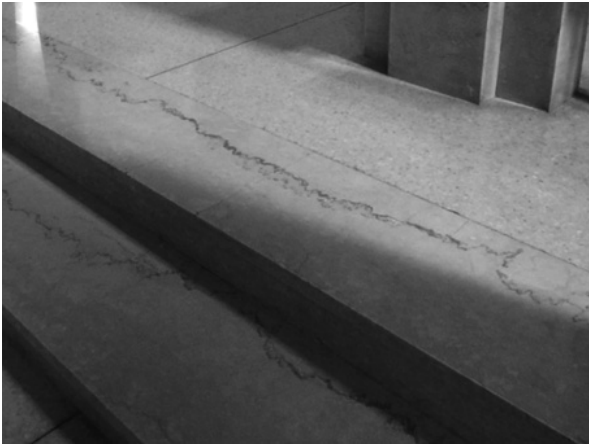


図4-15 内陣への段（ポテチーノ）

で祈りの空間として席が設けられているが、聖心女子大学の聖堂の側廊部分は通路空間となっている〔図4-11〕。また、祭壇部分はドームとなっており、ドーム中央には丸い開口部となるオクルスも設けられている〔図4-12〕。内部には、彫刻やモチーフもみられるが、いずれも西洋的な豪華さはなく、簡略化された表現となっている〔図4-13〕。

また、聖堂の内部に用いられている材料に注目すると、大理石は四種類の石材が空間によって使い分けられており、材料の素材感の違いをあたかも装飾の代わりとして用いているような傾向を見ることができ「図4-14・15・16・17」。こうした表現は、モダニズムというよりはアール・デコの傾向に類似しているといえよう。以上、キャンパス全体で見れば、キャンパスの中の重要な建築として、聖堂の存在をより明快に示すため、表



図4-16 内陣への段上の柵（水戸寒水石）



図4-17 祭壇の天板（霞）



現方法は近代化されているものの、歴史主義的表現を要素として残しているといえる。

いずれにせよ、改めて、聖心女子大学のキャンパスを構成する建築の特徴を、それぞれまとめると、以下のようになる。

○校舎（一九五〇年）・・

高さのある柱を用い強調している点や、縦長窓を用いている点から歴史主義表現の要素が確認できる。しかしながら、規則的に並ぶ窓や屋根形状から水平垂直への意識を感じられる。また、装飾的要素は排除されており、キャンパス内では最もモダンな建築表現がなされているといえる。

○講堂（一九五四年）・・

正面ファサードの柱表現や設けられた装飾などから、歴史主義建築の表現性が強く感じられる。また、水平・垂直を意識した直線的な意匠からは、モダニズム直前のアール・デコの雰囲気も感じられる。

○聖堂（一九五八年）・・

バシリカ式の平面形式に見られるように、教会建築の伝統性を継承しつつも、彫刻などの装飾は極めて簡略化された表現となっている。また、室内の材料では石を用い一つも多様な種類のものを用いるなど、装飾の代わりに材料の違いを表現として用いようとする意図が感じられる。こうした材料の素材感を重視する表現は、モダニズムよりアール・デコの傾向と共通するともいえよう。

また、聖心女子大学の全体の建築に見られる傾向としては、校舎（一九五〇年）↓講堂（一九五四年）↓聖堂（一九五八年）の順で歴史主義的建築表現が色濃くなっている点が挙げられる。竹腰の建築の特徴として、建物の

格式性が高いほど歴史主義表現が増加する傾向が窺えることから考えると、そこにはキャンパス内での建物の重要度が明確に表現されているともいえる。こうした時代に逆行している表現にこそ、竹腰の基本的な思想がよく表れ、信念を持って設計を行っていた姿勢が現れているともいえるであろう。

#### 4-4 小結

聖心女子大学の建築について、縦長窓が用いられる点や柱が強調されている点、石造のようにみせるデザインなど歴史主義的な意匠が非常に多く見られるが、それぞれシンブルな表現であり、意図的に歴史主義の要素を残しながら調和させていることが特徴的である。正門から構内に入りアプローチを抜けるとまず目に入る位置に建っている講堂や、カトリック系大学でもある聖心のシンボルであり、大学内で最も格の高い聖堂は、特にこうした特徴が顕著に見られる。

また、言説や作品の分析を通して、竹腰は住友工作部時代の経験などから西洋的な歴史主義や建物のスケール感を強調するようなデザインを用いることが、建築の格式性を表現するひとつの方法がみうけられる。そんな中でも時代性に沿ったモダニズムのデザインを意識して近代化を目指したのが聖心女子大学の計画であったといえる。

また、格式性を示すために歴史主義的な要素を設けていることが多い聖堂（礼拝堂）建築も、さらに簡略化され、限られた要素のみが残るなど、次第に近代化されていく様子がわかる。

## 5 結びにかえて

以上、本稿では、建築家竹腰健造の建築観とその作品の変容の過程と、代表作品である聖心女子大学について見てきた。その結果明らかになったことを以下に示す。

竹腰は戦後のモダニズムの流行の中で新様式の動きを認識し、前向きに取り入れつつ、大財閥住友の技師や日本建築協会会長を務めた経験から、建築のデザインが変化してもその建築に求められる格式や品位、質を表現するという考えを一貫して持ち続けていたと考えられる。また、竹腰は、オフィスや学校の校舎といった機能重視の建築にはモダニズム的な表現をし、聖堂や演劇場などの伝統や格式を重要視する建築には簡略化したものながらも歴史主義建築の要素を設けるといった方法を用いていたと考えられる。

こうした独自の建築表現は聖心女子大学にも見られ、校舎はモダニズム的なデザイン、最も重要と考えられる聖堂には歴史主義的な表現を用いたデザインにより、キャンパスのシンボリックな位置付けを明快にしているといえる。なお、竹腰の作品は、聖心女子大学以降さらに歴史的主義的表現の簡略化が見られることから、聖心女子大学は竹腰の建築の近代化表現への転換を示す代表作品といえる。

いずれにせよ、こうしたモダニズム的な近代化表現の中に格式性を示すために、歴史主義的表現を意図的に表し、それらの調和をめざすデザインこそ、竹腰健造の建築の特徴であると考えられる。

なお、本稿は、神奈川大学大学院工学研究科建築学専攻の院生として内田研究室に所属した下山美月が、2020年度修士論文として提出した論文をもとに、下山と内田が共同執筆したものである。論文作成時は、コロナ禍の最中で聖心女子大学のキャンパス調査ができず、文献調査に主軸を置かざるを得なかった。文献調査にあたっては、聖心女子大学教授の安發和彰氏にご協力いただいた。ここに記し感謝したい。

## 註

- (1) 長谷部鋭吉…一八八五年北海道札幌市生まれの建築家。一九〇九年東京帝国大学工科大学建築学科卒業、住友本店臨時建築部に入社する。各地の銀行建築を手がけ、一九三三年竹腰健造とともに独立、長谷部竹腰建築事務所を設立する。一九五〇年日建設計工務株式会社設立、顧問となる。一九六〇年七五歳で死去。長谷部は建築家・芸術家としても優れ、住友銀行京都支店は特に高い水準であると評価されている。
- (2) 坂本勝比古『日本の建築「明治大正昭和」5 商都のデザイン』三省堂、pp.128-140、一九八〇年。
- (3) 分析対象は以下三つのいずれかに当てはまり、かつ、外観意匠が確認できる作品とし、本稿では設計に関わったとされる五六件の作品を分析対象とする。①『建築と社会一九五九年一月号』の「竹腰健造特集」に掲載されている作品 ②『素顔の大建築家たち―弟子のみた巨匠の世界』（都市建築編集研究所／著、建築資料研究社、pp.85、二〇〇一年）にて竹腰の主要作品として記載されている作品 ③『日本の建築「明治大正昭和」五商都のデザイン』（坂本勝比古、三省堂、pp.128-140、一九八〇年）に掲載されている竹腰を設計者とする作品、および名前が記載され関与が窺える作品。
- (4) 渡邊研司「日本人建築家櫻井小太郎と竹腰健造によるRIBA建築家資格の取得について」『日本建築学会関東支部研究報告集（83）』pp.561-564、二〇一三年三月、「一九世紀末から二〇世紀初頭においてAASクールに在籍した日本人建築家について」『建築歴史・意匠（二〇二二）』日本建築学会、pp.123-124、二〇二二年九月一二

- 目。
- (5) 都市建築編集研究所、石田潤一郎『素顔の大建築家たち―弟子のみた巨匠の世界』建築資料研究社、pp.86-115、二〇〇一年。
  - (6) 安發和彰「聖心女子大学の聖堂建築―創建の経緯と概要」『宗教と文化』聖心女子大学キリスト教文化研究所 pp.83-104、二〇一〇年三月。
  - (7) 乾睦子「聖堂献堂六〇周年記念特集 聖心女子大学聖堂の大理石について」『宗教と文化』聖心女子大学キリスト教文化研究所、pp.29-33、二〇一九年三月一日。
  - (8) 表1-1-1:『素顔の大建築家たち―弟子のみた巨匠の世界』(都市建築編集研究所／著、建築資料研究社、p.85、二〇〇一年)をもとに、『日本の建築「明治大正昭和」五商都のデザイン』(坂本勝比古、三省堂、一九八〇年)、「日本人建築家櫻井小太郎と竹腰健造によるRIBA建築家資格の取得について」『日本建築学会関東支部研究報告集(83)』(渡邊研司、pp.561-564、二〇一三年三月)を参考にしてごる作成。
  - (9) 竹腰健造『幽泉自叙』pp.97-99、一九八〇年。
  - (10) 日高胖・一八七五(明治八)年東京生まれの建築家。(明治三〇)年東京帝国大学工科大学建築学科を卒業後、住友本店臨時建築部に入社した、創設時のメンバーのひとりである。(昭和六)年に退官するまで三一年間勤務し、住友營繕を支えその功績は大きかった。
  - (11) 都市建築編集研究所、石田潤一郎『素顔の大建築家たち―弟子のみた巨匠の世界』、建築資料研究社、pp.86-115、二〇〇一年。
  - (12) 聖心女子大学『聖心女子大学一九一六〜一九四八〜一九九八』pp.30-32、一九九八年一〇月。
  - (13) 『日本建築協会五十周年記念座談会 第二回座談会・昭和前期(昭和初年―終戦)を語る』『建築と社会』日本建築協会、pp.46-52、一九六八年。
  - (14) 一九五六(昭和三一)年二月二二日に行われた大阪倶楽部講演会「近代建築偶感」の内容は「竹腰健造特集号」『建築と社会一九五九年一月号』(日本建築協会、pp.115-124、一九五九年一月)に掲載されてごる。
  - (15) 「大正時代の中の島 北浜界限」『建築と社会一九五八年一月号』日本建築協会、pp.68-69、一九五八年一月。

(16) 「新春所感」『建築と社会』一九五三年一月号、日本建築協会、p.1 一九五三年一月。

(17) 「竹腰健造特集号」『建築と社会』一九五九年一月号、日本建築協会、pp.57-112、一九五九年一月。

(18) 表の中の\*の印のある作品は、竹腰が設計に関わっているが外観意匠を担当したかどうか詳細が不明確である建物とする。特に住友時代の作品が多く、住友の意匠は竹腰にも通ずるものがあるとして、それらの建物も含め分析を行っている。

(19) 各項目の該当する基準について：

①窓形状……「縦長窓」、「横長窓」、「連続窓」、「アーチ窓」の四つの窓形状を外観写真より判断する。横長の「連続窓」の場合は、「連続窓」のみに該当することとする。また、「その他」の項目には該当しない形状の窓や他の開口部に関し記載する。

②柱表現……「柱の有無」を確認したのち、「オーダーに則した柱」、「オーダー的ではない柱」の二つの外観写真より判断する。「オーダーに則した柱」は、エンタブラチュアを持つ西洋的なオーダーが確認できる柱表現や、オーダーのような柱頭飾りを確認できる柱表現も含めることとする。「オーダー的でない柱」は、装飾性のないシンプルな柱表現とし、丸柱や角柱いづれも含めることとする。

③装飾性……「窓装飾」、「窓周りの装飾」、「带状装飾」、「エンタブラチュア」、「コーベル」の五つの装飾を外観写真より判断する。「窓装飾」は窓格子を含める窓への装飾とし、「窓周りの装飾」は出窓を含める窓の周辺への装飾とする。「带状装飾」は「エンタブラチュア」のフリーズ部分の装飾とエンタブラチュアは確認できないが、带状の装飾が確認できる場合に該当すると判断する。「エンタブラチュア」はコーニス、フリーズ、アーキトレープの三つが確認できるものを該当すると判断する。「その他」の項目には、ペディメントやオクルス、モチーフなど該当しない装飾を記載する。

(20) ④外装仕上げ材……「石張り」、「モルタル」、「木材」の三つを資料や外観写真から判断する。特に「モルタル」については、同時期の長谷部竹腰事務所作品より、類似していると思われる外装仕上げ材を判断している。チェコ人建築家。一九〇三（明治三六）年プラハ美術専門学校建築科卒業。一九〇七（明治四〇）年来日。

（堀勇良『日本の美術8・外国人建築家の系譜』No.47「至文堂二〇〇三年より」。

- (21) チェコ人建築家。一九〇九(明治四二)年プラハ工科大学卒業。一九一九(大正八)年来日。  
(堀勇良『日本の美術 8・外国人建築家の系譜』No.44『至文堂二〇〇三年より』)。
- (22) 表4-1: 『聖心女子大学一九一六〜一九四八〜一九九八』(聖心女子大学、pp.3-19、一九九八年一月二三日)、  
『幽泉自叙』(竹腰健造、一九八〇年)をもとに作成。
- (23) 『聖心女子大学』については、主に『聖心女子大学一九一六〜一九四八〜一九九八』(聖心女子大学、pp.3-19)一九九八年一月二三日)、  
『幽泉自叙』(竹腰健造、一九八〇年)を参考にまとめた。
- (24) 『聖心女子大学クニハウス・パレス等(旧久邇宮邸)の建築報告書』(聖心女子大学、p.2、二〇一七年)より、  
パレス・学生会館、クニハウス・展示室・応接室として利用されている。
- (25) 竹腰健造『幽泉自叙』創元社、pp.21-22、一九八〇年。
- (26) 聖心女子大学関連図面より社名は日本建設産業の記載が確認できる。
- (27) 竹腰健造『幽泉自叙』創元社、p.22、一九八〇年。
- (28) 都市建築編集研究所、石田潤一郎『素顔の大建築家たち―弟子のみた巨匠の世界』、建築資料研究社、pp.86-115、  
二〇〇一年。
- (29) 『聖心女子大学一九一六〜一九四八〜一九九八』(聖心女子大学、一九九八年一月二三日)より作成。
- (30) 『聖心女子大学一九一六〜一九四八〜一九九八』(聖心女子大学、p.22、一九九八年一月二三日)。
- (31) 安發和彰『聖心女子大学の聖堂建築―創建の経緯と概要』『宗教と文化』聖心女子大学キリスト教文化研究所、  
pp.83-104、二〇一〇年三月。